

2.2 貴州省徳江の儺堂戯

2.2.1 貴州省の儺戯

儺礼および儺戯は現在なお江西省、貴州省、雲南省、四川省などでかなりおこなわれており、視点を広げれば、「儺戯系統に属する劇の種類は、現在知られているもので約二、三十」ある。民族としては漢族のほかチワン、^{ミャオ}苗、^{フイ}侗、^{トン}侗、^イ彝、^{トゥチャ}土家、コーラオ、ムーラオ、チベット、メンパ、モンゴルなどの民族に伝承されている¹⁾。

一方、貴州省では漢族のほか、土家、コーラオ、苗、彝、侗といった、少数民族の居住する地方の村で儺戯が伝承されている。これは、1980年ごろまでは当局により迷信視されて、その活動はひどくおさえられていたが、1980年代の後半からようやく「復権」のきざしがみられ、地域によってはかなり詳細な記録、報告がみられるようになった。とはいえ、貴州省全域の儺戯の分布、民族、地域、担い手の流派ごとの差違などといった基礎的な資料は十分ではなく、1995年11月、わたしが現地に行ったとき、省の文化局もその全貌について公表するほどの資料は持っていなかった。

貴州省の儺は大きく三つに分けてみることができる。その第一は貴州省の東部、湖南省に接した地域の儺である。廣田律子によると、「銅仁・遵義地区を含む地域」の儺であるが、道真地区もここに入れてよいだろう。後述する徳江の儺はここに含まれる。この地域の儺の内容は互いに似た点が多い。それらは四川省東南部および湖南省西部のものと類似する点が多い。

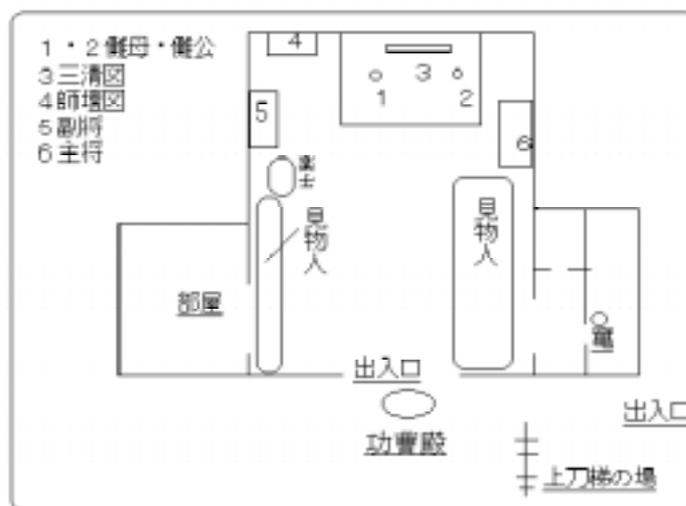
第二は安順県の老漢族が伝承する地戯で仮面のモノたちが歴史上の人物に扮して戦闘場面をくり広げるものである。ただこれも「玩新春」とか「跳米花神」とかよばれていて、これをするにより一年のはじまりを画す、あるいはコメの増産を祈願するもの、つまり元来は初春の儺であったとおもわれる。

第三は貴州省西部の高原地帯に住む彝族が伝える撮泰吉である²⁾。正月のはじめにムラのソトから訪れてくる仮面のモノたちがムラおよびイエを祝福するものである。これを日本に紹介した伊藤清司によると、仮面をつけたモノは元は男女のカミだけで、おつきのモノたちは仮面をつけていなかったようである。この男女のカミは農事を予祝し、病人を癒し、みずから性交のまねもした³⁾。かれらは年末年始に訪れてさまざまな理由から疲弊したムラの秩序をすべて根元にもどして帰っていった⁴⁾。

貴州省の東部の「儺戯」⁵⁾とはどのようなものか。それは、地域に住む^{かななぎ}巫が主としてイエの要請を受けて、臨時にイエのなかで巫儀を施すものである。巫は男が中心で、かれらは四、五人のチームを作る。そして、音楽と踊り、またカミの伝承詞章を持ち、それらを駆使しつつカミゴトを多彩にくり広げ、それにより諸種の神霊をよび寄せ、もてなし、イエの側の祈願、あるいは感謝の念を伝えてやる。またそのあとで仮面のモノが現れて地域やイエの祝福をより確かなものとする⁶⁾。これらはほとんど朝鮮のクツ(巫儀)をおもわせるが、そこになお、いくつか験力を誇示するような呪術的な所作や曲芸めいた雑戯が加えられる(後述の「^{カイホンシャン}開紅山」「^{サーホワ}殺鐮」など)。この点は朝鮮の巫俗にはみられない。

貴州省の儺戯の全貌が知られていない現状では、どこの地域のものが典型というわけにはいかないが、各種の儺戯のうちでもいち早く国内外の識者に知られたのが徳江県の儺

戯で、その概要は・修明「貴州省徳江県トゥチャ族の仮面劇」⁷⁾や田仲一成「堂儼の伝播(上) - 黔東土家族の“過関煞”」⁸⁾で知ることができる。田仲のばあい、1990年当時の現地の開放度という制約から、儼の戯つまり「あそび」の場にはのぞむことが許されず⁹⁾、主として祭儀の分析に重点が置かれていたが、そこに提示された基礎資料はひじょうに詳細で以下の叙述においても大いに参考となった。



▲[図1]冉氏宅内の祭場

2.2.2 徳江の儼堂戯

貴州省徳江県青竜鎮橋頭村香樹園の冉氏宅では、9歳になる男の子瑞強君が健康に育つことを祈願して儼堂戯「過関煞」をした。担い手となった土家族¹⁰⁾の巫師土老師はもともと県内の穩坪村に住んでいた張毓福ほか5名で、期間は3日間であった。この土老師らは徳江でもなかなかすぐれた巫であるらしく、実際、その儀礼の一つ一つはみごたえのあるものであった。かれらは茅山派¹¹⁾の巫師である。

過関煞とは「生長期の児童が病弱多病であるとき、その原因を“関煞神”がその子に害を加えていることにありと考え、巫師を招いてその子に“関”を通過させる儀式」のことである¹²⁾。典型的なイエの儼であるが、三日の儼の間、近隣の見物客は引きも切らず、その熱気はかつての儼もかくやとおもわせるに足りるものであった。

○儼公、儼母

祭壇は屋内に設ける。正面に儼公、儼母の木像（[図版1]）を置き、その背後、上部には左から玉清・太清・上清を描いた三清図が掛けられている。これらは道教において最高位に位置するカミであることはいうまでもない。土老師は儀礼のはじめは、いつも、この祭壇に向かって立ち、そこから右回りに動いて、「五方」を対象とする。また左奥には、土老師たちの先生たちをまつる「師壇」があり、師壇図が懸けられてある（[図版2]）。この師壇図の下の部分には歴代の師匠の名が小さな字で多数書き込んであり、一種の系図といえる。物故した巫師の加護のもとで無事に儀礼を終えるという構図がここにはみられる。



▲[図版1]儼公(右)と儼母(左)。これは過関煞の儀が終わって送り返すときのもの。儀礼のあいだ両神は祭壇の上に安置される。

張毓福老師によると儼公、儼母はもと、実の兄と妹で洪水の際に逃れて、のち人間をはじめて造ったという。これとは別に、儼公儼母は恋愛を阻まれて川に投身した男女の

ことであるとか、あるいは王により殺された男女であったが、のちに民衆の間で手厚く弔われ、靈験を發揮したことから、広くまつられるに至ったという伝承もある¹³⁾。こちらの伝承によると、かれらの死霊が地域住民に災いをもたらすということがはじめにあり、これを除くためにまつられたという性格が強うかがわれる。現在では、所願成就ののちなど慶事にも願ほどきの儺戯をおこなうが、もとは危機克服のためのものであったのだろう。いずれにしても、土老師たちが儀礼のあいだ直接、向き合っているのは、この男女のカミで、これは祭儀の最終段階で、送り返される(後述「24.送神上馬ソンセンシヤンマー ヨオヌオシエハイ(游儺涉海))。

○過関煞の構成

過関煞には、法事に当たる部分と仮面戯の部分があるが、法事のなかに仮面が用いられることもある(後述「7.和会交標ホーホイジャオピャオ」)。また数多い仮面戯の演目のなかには漢族の地芝居の影響を強く受けたものも多く、それらはおおむね独自性に欠ける。ただ、「李龍リーロン」「開路カイルー」「開山カイシヤン」などは、原初の仮面戯かとおもわれるもので、仮面戯の部分が単なる娯楽だとはいいきれない。以下の次第一覧では三日間の祭儀の題目とその要点を祭祀芸能の観点からまとめた。

○次第一覧

1. 開壇(11月18日) [[RealVideo Streaming | Download \(14M\) | Download \(2.5MB\)](#)]

楽器は銅鑼(大、小)、太鼓、牛角。張毓福土老師は頭トウウザー 扎シエダオ をかぶり、師刀パイダイ を携え、肩には排帯を載せる。内外のカミをよび招く序曲。室内でまた敷居のところゴツァオ で一人舞。唱えごと。メリハリのある踊りと表情で観客をひきつける。土老師の立つ筵は九州(世界)を表す([[図版3](#)])。この段階はまだカミへのよびかけにすぎない。カミは搭橋の段階でやってくる。

2. 發文敬竈

[[RealVideo Streaming | Download \(4.4M\) | Download \(0.8MB\)](#)] 土老師が冉氏一家の祈願内容を記した表函を盆に載せ、これを両手で恭しく頂き舞う。そしてイエのソトの功曹殿ゴンツァオ に着座している功曹ゴツァオ¹⁴⁾を通して天界のカミに伝え([[図版4](#)])、ザオシエン [[図版5](#)])、ついで台所で竈神ザオシエン をまつる([[図版6](#)])。



▲[図版2]師壇図。物故した土老師の加護のもとで跳神の儀をする。下の部分に先制にたる土老師たちの名が記されている。



▲[図版3]開壇で神々へのよびかけをする。足元の奠産は世界を象徴する。



▲[図版4]功曹殿の内部に設けられた図像。最上部に三清がいて、ここへ表を伝達する。



▲[図版5]土老師が主側の願いを書いた書簡を携えて功曹のもとへいく。やがてそれが天界に伝えられる。



▲[図版6]発文のあとで台所へいき、竈神をまつる。



▲[図版7]橋安。このような橋がソトから祭場のうちへと掛けられる。神々が船に乗り、海や山川を渡ってくるという。

ターチャオ 3. 搭橋

[[RealVideo Streaming](#) | [Download \(9M\)](#) | [Download \(1.6MB\)](#)]

カミの来臨のための橋掛け。橋安チャオアン(巻物に絵をかいたもので儼神界を表現、[図版7])を広げる。そこには竜船がえがかれ、船の上にはカミやモノが乗る。神々は天、海、山を越えてやってくる。この橋の上に小山¹⁵⁾(地儼)が置かれるのも注目される。これは小さな木像で表現された男神で、盆の上に安置される([図版8])。橋を作り守る役割と考えられる。同時に、橋には鬼がつきまとうのでこれを払う([図版9])。橋には門があり、カミが着座したのち、神送りのときまで門を閉め、儀礼の最後に橋を外す。この橋掛かりとカミ来臨の形は注目される。



▲[図版8]搭橋。橋を守るモノとして「地儼」が橋安の上に置かれる。

リーロウ 4. 立楼

[[RealVideo Streaming](#) | [Download \(3M\)](#) | [Download \(0.6MB\)](#)]

橋を渡ってきたカミのために高殿を作る。土老師は木を切って楼を作るさまをたのしげに演じる。この前後の具体的なカミ迎えは東アジアに共通の古いかたちだとおもわれる。たとえば濟州島でも、長いカミよばいのあと、神門クムンヨッリムが開き(神宮門開き)、カミの坐定のさまオリジョンシンチョンケ(五里亭神請じ入れ、神々の着座)チョンデウが唱え演じられるが、徳江でも同じような意味で、高殿作りが唱えられる。



▲[図版9]橋の周囲には招かれざるモノたちもたくさんいるので、これを土老師が神鞭をふるって追いやる。

ザオシイ 5. 造席

[[RealVideo Streaming](#) | [Download \(2M\)](#) | [Download \(0.5MB\)](#)]

高殿ができたあとでは、神々の座席が準備される。張毓福老師は筵シマを巻いたものを携えて軽妙な踊りでこれを表現する([図版10])。なお、劉枝萬によると、この筵を巻いたものを携えて跳舞することは中国南部の法師や道士がよくするところで、これには辟邪の意味がある。たとえば新しい廟宇が落成し、神像を安置する際にいちはやく廟内に盤踞ムシロしているかもしれない悪霊を追い払う意味で、むしろをふるう。このほか、王爺送りの際に用いたり、病人の頭上でかざしたりと、種々のばあいにムシロをふるって悪霊を追っている¹⁶⁾。



▲[図版10]土老師は筵(カミの座)を持ち股のあいだをくぐらせたりして楽しげにおどる。これには邪を祓う意味がある。



▲[図版11]和会交標。交標童子と交標小姐が神々のかたしろを濡ってそぶところ。神々の和会が表現されている。



▲[図版12]和会交標。和尚が現れて和会の輪に加わる。モノの登場。



▲[図版13]カミの場を清める土老師の勇壮な棒の舞い。

アンインザーツァイザオンイ

6. 安宮扎寨造席 [[RealVideo Streaming](#) | [Download \(0.6M\)](#) | [Download \(0.1MB\)](#)] 五方に軍営を設け、鬼をはらうという内容の唱えごとをする。

ホーホイジャオピャオ

7. 和会交標 (11月19日) [[RealVideo Streaming](#) | [Download \(5MBM\)](#) | [Download \(0.9MB\)](#)] 儼戯にくるカミ(上元36神、下元24神)の和会。カミの由来をおどり、かたる。交標童子、交標小姐(若いむすめ)、和尚の3人による仮面戯が含まれる([図版11]、[図版12])。交標とは細い棒をカミの数だけ作って束ねたものである。神々の和会が男女のあそびで表現される。そこへ和尚が現れたのはあそびの場に必ず現れる祝福者を意味しているのだろう。中国には大頭和尚¹⁷⁾の伝統がある。

チャーファーウーチャンピンマア

8. 差発五猖兵馬 [[RealVideo Streaming](#) | [Download \(2M\)](#) | [Download \(0.5MB\)](#)] ここで、「小山」という名の小さな人形が持ちだされ舞わされる。小山は五方の猛々しい兵馬を司るカミで、鬼をはらうことを指揮する。また土老師は悪鬼を追いやるために杖の先に火を付け、これを振り回す([図版13])。さらに鶏を杖の上に立てて験力を誇示する([図版14])。巫がトリを用いて巫儀をおこなうことは現在、濟州島などでもみられるが、これはひじょうに古い習わしである¹⁸⁾。

9. 大游儼 [[RealVideo Streaming](#) | [Download \(5MB\)](#) | [Download \(0.9MB\)](#)]

カミの座が確定し、あたりはすっかり清められた。そこで儼公、儼母のあそびがふたりの土老師によってはなやかに演じられる。正装した土老師が唱えごとを唱え、それに導かれるようにひとりの土老師が儼公、儼母を背負って舞う([図版15])。楽士の頭上には橋安と交標が懸けられる。神々の集ったなかで中心となる儼公儼母があそぶ。カミもてなしの一つの絶頂であろう。



▲[図版14]小山を祭場の中央に持ち出し、土老師の祖先を守ってくれるようにと祈る。トリは杖の頂ぎに載せられると鎮まる。土老師の験力がこうして誇示される。



▲[図版15]神々がみまもるなか、儼公と儼母が舞いおどる。



▲[図版16]みずからの手で小刀を頭上に打ち込み、おどる。験力の誇示。これを抜き取るまで血は流れない。



▲[図版17]土老師の血を身に負う茅人。開山をおこなった土老師はこの茅人の化身だった。



▲[図版18]開山猛将はこの仮面戲の冒頭に現れて斧をふるい、山を開く。これにより祭場を設けるのだらう。赤面のモノ。



▲[図版19]開山猛将の古面。

10. 開紅山 [[RealVideo](#) | [Streaming](#) | [Download \(8.4MB\)](#) | [Download \(1.5MB\)](#)]

土老師の験力の誇示。頭の頂に小刀を打ちこんでおどる（[図版16]）。刀を抜き取るまで血は流れないが、本物の小刀が頭のなかに食いこんでいて異様だ。刀を抜き取る際に血が流れ出るが、これを白紙に染み込ませて、当該のイエの吉凶を占うのに用いる。このかなり危険な呪術をするとき、土老師は茅人の化身となっているので血は流れないのだという。最後に流された血は茅人の衣服につけられ、このかたちで安置される（[図版17]）。



▲[図版20]開路將軍は開山のあとを受けて、道を整える。赤面のモノ。

11. 開山猛将 [[RealVideo](#) | [Streaming](#) | [Download \(3.5MB\)](#) | [Download \(0.6MB\)](#)]

開山猛将の跳舞（[図版18]）。本来、仮面戲は開洞の儀をへてやるものだが、時間の都合で先に仮面戲をはじめた。開山は斧をふるって岩を砕き、鬼を払う。武将で赤面（[図版19]）。



▲[図版21]開路將軍の古面

12. 開路將軍 [[RealVideo](#) | [Streaming](#) | [Download \(2.7MB\)](#) | [Download \(0.5MB\)](#)]

開山につづいて、開路將軍が登場、長い大刀をふるって跳舞する（[図版20]、[図版21]）。文字どおりカミの道を開く將軍で赤面。開山・開路はそれぞれ15分ほどのもの。これも時間の関係で先に演じられた。これらはいわば土老師の唱えごとを中心とした呪的儀礼を再度、演じるものといえよう。その趣旨は祭場を整え、秩序を維持することである。儼戲には必ず境界を定めるモノが現われる¹⁹⁾。



▲[図版22]開洞に先立って隠された状態の仮面。

13. 判^{バンシエン}牲 [[RealVideo](#) | [Streaming](#) | [Download \(3.5MB\)](#) | [Download \(0.6MB\)](#)]

神々への神饌献上。大きな生きた豚が儼公・儼母の前で犠牲にされる。豚を殺すのは介添えの男たち。土老師はこの間、ござを被って隠れるようにする。



▲[図版23]尖角將軍の古面。

14. 膺^{タンバイ}白 [[RealVideo](#) | [Streaming](#) | [Download \(0.6MB\)](#) | [Download \(0.1MB\)](#)]

犠牲の豚を祭壇の前に置いて、儼公、儼母へ報告し、神意を占う。

15. 開洞 ^{カイトン} [[RealVideo](#) | [Streaming](#) | [Download \(15MB\)](#) | [Download \(2.6MB\)](#)]

仮面戲のはじまりを告げる儀である。仮面は祭場の中央に並べられるが、これらはすべて桃園にあるのでまだみえない状態だということが示唆される（[[図版22](#)]）。しかも桃園には鍵がかかっている、だれかが開けなければならない。その役を担ってやってきたのが尖角將軍である（[[図版23](#)]）。この將軍はソトからやってきたモノで祭場の入口でその力を誇示する（[[図版24](#)]）。やがてイエの主を迎えられ、もてなしを受ける（[[図版25](#)]）。さらに唐氏仙娘²⁰に出会い、ふたりは仲良くなる。そこへ和尚や医者が出てきてまとわりつく（[[図版26](#)]）が、將軍はこれらを振り切る。そして將軍と唐氏仙娘（[[図版27](#)]）は桃園の戸を開けに行く。このあと、日常の暮らしと密接な関わりのある仮面のモノたちのあそびが続々とくり広げられる。

16. 秦童 ^{チントン} [[RealVideo](#) | [Streaming](#) | [Download \(6.7MB\)](#) | [Download \(1.2MB\)](#)]

秦童は人物名であるが、同時に仮面戲の名でもある。人の下働きをする秦童が主人格の甘生をこけにするもので、秦童は儼のあそびにおいては人気者である（[[図版28](#)]）。主人と下僕が科挙のため都にいき、主人の甘生は落第し、下僕の秦童は受かるという地位の転倒がみられる（[[図版29](#)]）。秦童は他の地域のばあいにも、豚の売り買いをする者、犬を追いかけまわす者、下僕などの身分である。ただし、すべての秦童が主人より賢いというような地位の転倒を演じるわけではない²¹）。ここにはおそらく観る側の要求というものも反映されているのであろう。

朝鮮の仮面戲における下僕マルトゥギと同じ位相にある人物で注目される。

17. 造船清火 [[RealVideo](#) | [Streaming](#) | [Download \(5MB\)](#) | [Download \(1.7MB\)](#)]

音楽が急調になり、緊迫した雰囲気の中、土老師は木片に火をつけ、これをもってイエの隅々をきよめてまわる（[[図版30](#)]）。儀礼の名称からいって模造の船があったものかもしれない。実際、そうしたものをこしらえて災いを船に載せソトに持っていき捨てる場所もある²²）。

18. 殺鎌 ^{サーホワ} [[RealVideo](#) | [Streaming](#) | [Download \(1.7MB\)](#) | [Download \(0.3MB\)](#)] 土老師の験力の誇示。熱した鋤を素



▲[図版24]尖角將軍の来訪。入口で力が誇示される。



▲[図版25]イエの主が尖角將軍を迎え入れる。將軍自身がイエの祝福者でもあるが、さらに開洞を経て多数の祝福者がこの場によび寄せられる。



▲[図版26]尖角將軍と唐氏仙娘のあそぶところへ和尚がやってきてともにあそぶ。



▲[図版27]唐氏仙娘の古面。

足で踏み、舌なめずりをする（[[図版31](#)]）。百戯、雑戯の伝統を継いだもの。



▲[図版28]秦童の古面。



▲[図版29]甘生(左)は秦童(右)を連れて科挙に出かけるが、落第する。合格したのは秦童のほうであった。



▲[図版30]緊迫した音楽とともに火をもってイエの隅々を清める。

19. 梁山土地、押兵先師(11月20日) [[RealVideo](#) | [Streaming](#) | [Download \(1.8MB\)](#) | [Download \(0.3MB\)](#)] 仮面戯。1人の土老師がつづけて跳舞する。農民が「梁山土地」の跳舞を数多くみると収穫が増えるという。梁山は生前、農夫であったが、のち、鳥獣の害を防ぎ五穀の実りを管掌する土地神になった（[[図版32](#)]、[[図版33](#)]）。一方、押兵先師は諸種のカミと兵馬を引き連れて儼壇に到来し、主側の平安を保ってやる。



▲[図版31]土老師は灼熱した鋤をなめてみせる。

20. 李龍 [[RealVideo](#) | [Streaming](#) | [Download \(2.3MB\)](#) | [Download \(0.4MB\)](#)]

土老師三人による乞食の仮面戯。乞食が再家の入り口に来て、もの乞いをし、やがて竈口にいき竈神をまつり、酒や食べ物でもてなされる（[[図版34](#)]、[[図版35](#)]）。李龍は背中に蓑のようなものを着け上半身裸である。いかにも古い感じの来訪者である。李龍というのは実は唐の時代の天子だという。福威があるので人間世界の一切の苦難を身に引き受けすることができる。だが、唐王叫化ともいわれ、今は乞食に身をやつしているのだと信じられている（叫化子は乞食のこと）。それで土老師はこれをよぶ。李龍は主側から酒食をもらい、のちこれを路地に投げ、雑鬼をもてなす。これは日本古代のほかい人の来訪をおもわせる。宋代の打夜胡²³⁾の系統のモノであろうか。祝福者でもある²⁴⁾。



▲[図版32]梁山土地の古面。



▲[図版33]五穀をつかさどる土地神、梁山土地。

21. 上^{シャンシュウ}熟
供物献上。

22. 上^{シャンダオティ}刀梯 [[RealVideo](#) | [Streaming](#) | [Download \(5.9MB\)](#) | [Download \(1MB\)](#)]

張毓福老師が庭に出て素足のまま刀上りをする。まず祝福すべき子供、瑞強君を背負ったまま上り、いったん降りてきてから、今度はひとりで刀のはしごを上り、験力を誇示する（[[図版36](#)]）²⁵⁾。百戯、雑戯の伝統を継いだもの。



▲[図版34]李龍来訪。乞食の身なりをしているが、唐王の化身といわれ、人間世界の苦を一身に担う。

23. 過 関 ^{グオコアン} [[RealVideo](#) | [Streaming](#) | [Download \(12MB\)](#) | [Download \(2MB\)](#)]

今回の儺戯の眼目である。冉瑞強君の靈魂が煞神にとりつかれないように、「関」ごとに十二いる煞を払っていく。茶碗を十二個円状に伏せて並べ、十二靈関²⁶⁾を象る。この上を張毓福老師と瑞強君が歩いていく。このとき土老師は令牌^{リンバイ}という木片で作った巫具で各関の陰陽を占いつつ渡っていく。関の卦が陰のとき、茶碗は神棍（杖）により突き壊される（[[図版37](#)]）。そして、最後に、瑞強君は土老師に導かれて筒のなかを抜けて厄払いを完了する（[[図版38](#)]）。

24. 送神上馬 ^{ソンセンシャンマー ヨウヌオシェハイ}（游儺涉海） [[RealVideo](#) | [Streaming](#) | [Download \(4MB\)](#) | [Download \(0.7MB\)](#)] カミ送りの儀である。子供の過関煞が無事終わり、これを見まもっていた神々も帰ることになる。土老師が儺公、儺母を両手に掲げて踊りながら送り返す。独特の送り儀礼である（[[図版39](#)]）。神々は馬に乗って帰るとも、また海を渡って帰るとも観じられていたことがわかる。ここで祭場の飾りをすべて取り除く。

25. 安 香 火 ^{アンシャンフウオ} [[RealVideo](#) | [Streaming](#) | [Download \(5MB\)](#) | [Download \(1MB\)](#)]
居残る鬼神を追いやるべく火で祭場をきよめる。

26. 掃 蕩 ^{サオダン} [[RealVideo](#) | [Streaming](#) | [Download \(1.4MB\)](#) | [Download \(0.3MB\)](#)]
祭場を掃ききよめて、すべての儀礼を終える。

2.2.3 徳江の儺堂戯の特徴

前節では三日間の儺の次第を忠実に再現してみた。ここで比較対照の見地から全体の儀とその意味を振り返ってみたい。

○初日のカミよばい

初日、午前10時過ぎにはじまった開壇から造席までの一連の祭儀は昼食をはさんで夜、8時過ぎまでおこなわれた。それは儺神界にいる儺公、儺母をはじめとしたさまざまなカミと土老師らの祖先、亡き先生らを来臨させるための、入念な手続きであった。おそらく何も前提がなければ、わたしはこの長ながとしたカミよばいに閉口したことだろう。ところが、この長い招神儀礼は濟州島の巫俗儀礼 **チヨ**



▲[図版35]李龍の古面。



▲[図版36]雨もよみのなかでの上刀梯。土老師の強い意志がうかがえる。



▲[図版37]十二靈関を一つずつ越えていく。陰卦のときは手にした神棍で関を突き壊す。

ガムジェにおいてすでに経験したものであった。

カミは門を開けて、橋を伝ってやってくる。しかも、おつきのモノや相伴にあずかろうとする雑鬼どももたえずはいつてくる。そこで土老師の跳舞にはかならずといつてよいくらい神シェンビアン鞭を地に向けて打ち下ろす仕種が伴う。この踊りは済州島などにはないもので、はじめ、わたしはその動作がよくのみこめなかった。

この鬼神を追い立てる跳舞²⁷⁾は安営扎寨のなかでふたたび確認された。ここでは鬼神が五方に分類され、それぞれの方角で遮られた。どうやら徳江の儼戯では雑鬼を追い払うことには格別の配慮がなされているようだ。

ところで、開壇を担当した土老師張毓福の演戯はなかなかの見物であった。かれは表情が豊かで、開壇のはじまりではさわやかな笑顔をみせたが、一方、鬼神を払ったり、一段の儀礼の終わりに牛角を吹くときなどはひきしまった顔になる（[[図版40](#)]、[[図版41](#)]）。そしてその自在な身体演戯とカミよばいの唱えごととが相まって、数時間のあいだの招神儀礼はけっして退屈でなかった。もちろんこの儼をみに集まった近隣の人たちにとって、これはたいそうな催し物なのであった。

こうした儀礼冒頭の雰囲気や冉家の誠意ある土老師へのもてなしをみて、わたしは、これがクツそのものであることを確認した。儼はやはり、けっして単純な鬼やらいではなかった。

○土老師の家系と活動

今回のチームのまとめ役張毓福に、その来歴をかたってもらった。

1995年現在、45歳。父親も土老師、そのイエは代々が土老師で、自分の代までで62代になる²⁸⁾。14歳のときに儀礼をやるようになり、22歳のときに、正式な土老師になる儀礼「跳ティヤオシエン神」をやった。これは7日間の儀礼で、自分にとって先生にあたる人をよび、豚、羊、鳥を犠牲にして盛大にやった。昨今、よばれていくところは数えきれないほどだ。陰暦の10月から12月にかけてが多く、



▲[図版38]この儀礼の核心である子供の過関。土老師の右に立つのが冉瑞強君9歳。この筒をくぐり抜けると簪を完全に落とすことができる。



▲[図版39]送神上馬あるいは游儼涉海といい、儼公、儼母を送り返す。



▲[図版40]土老師張毓福は観る者を楽しませるにたる表情の持ち主である。開壇のはじめ。



▲[図版41]開壇の末尾、天界に儀の終わりを告げる。

多いときは一冬で60回も儺をやる。

もっとも、これは1980年以來のことだ。儺は3日間、7日間の規模でやることが多い。そのきっかけは、「病氣治し」「還曆の祝い」「子供の成長祈願」「家庭にいいことがあったとき、不幸があったとき」などで、ごくまれにムラに火事など、よくないことがあったとき、「掃^{サオツァイ}寨」といって、一日二日、お祓いをしてやることもある。

今回の土老師は6名、そのひとりひとりが独特な雰囲気を持っていたが、張毓福のいわば巫師としての行為のほかには、開紅山や殺鑊などの呪的な儀礼が目についた。とくに開紅山はかなり緊迫した雰囲気に包まれる。頭上に小刀を打ちこむものの、そのときの土老師は「茅人」の化身なので血は流れないという。なるほど地には人形が据えられてある。これがイエの災いを担うというのであろう。しかし最後に刀を引き抜くときには、血が流れる。その血は当の家庭の吉凶を占うものだという。わたしには、この儀礼はかなり危険な行為にみえた。徳江県で、これができるのは三人にすぎないとのことであった。

土老師は神々をよぶ巫であると同時に、よばれた神霊にもなり代わる。ここから仮面の担い手となったり、また激しい身体訓練を必要とする百戯あるいは雑戯の担い手ともなる。ただ、他の二、三の地区でみた限りでいえば、刀の梯子の上によじのぼって曲技を披露したり（[図版42](#)）、油の鍋に手を入れ物をすくい上げたりする雑戯はやはり余技であろう。

○はじめの仮面戯

冉氏のイエの儺戯の二日目は、神々の和会を旨とする和会交標ではじまった。これは童子、むすめ、和尚の面をつけた三人の登場人物が、この場に招かれた儺公、儺母以下のカミの、それぞれの来歴をかたりつつおどるもので、いわば前日の招神儀礼の再演である。しかも、それは多分に滑稽に演じられる。こうした**おどけた人物による説明のし直しは、巫俗儀礼に通有のかたち**であり、たとえば韓国東海岸の別^{ビョルシン}神クツのなかでは、世尊^{セジョン}クツという巫女の儀礼に対して、その直後に楽士（男巫）たちが寸劇のようなかたちで盗人坊主捕らえ^{チュントドックチャビ}を演じた。世尊クツと寸劇、この両者に共通するものは僧の来訪ということだが、一方は黄金山からきた験力あふれる僧、他方はこのハレの儀礼の場に侵入した盗人坊主といった対照をみせる。だが、高貴なるカミとそれに付随して登場する不屈きなモノ、この組み合わせには芸能のはじまりを示唆するものがこめられている²⁹⁾。

今回の儺戯では開洞の前に、開山猛将、開路將軍が現れてしまったが、これらは、山の岩を砕き鬼を払い、また道を開く先導者のさまを表現したものである。通常の順序でいえば、この二人の神人の所作が諸種のカミ来臨のための道均しになる。それは同時に祭場で



▲[図版42]かなり曲芸的な上刀梯。貴州省松桃の儺戯でみられた。

あるイエにカミの道が通じることでもあり、イエの祝福にもなる。一方、それは、神々の世界と人間の住むところのあいだには険しい道が横たわっているということをも意味する。ちなみに、この考え方は濟州島の迎えクツにおける道均しマジという段でもみられる。たとえばジルチムで、神房（巫覡）は竹の棒を携えて鋤き起こしの仕種をみせる。

開山猛将については伝説がある。かれはもと冀州崔家荘に住んでいた武将で、崔洪といった。鋭利な斧を携えてその地区に現れる妖怪を退治した。そのため、今でも人びとは病気になる時は土老師に頼んでこの開山猛将の演戯をしてもらおうのだという³⁰⁾。こうした伝説はおそらくいくらでもありえよう。この猛将を実在の人物とする伝承は、おそらくのちに付加されたものであろう。それはともかく、その演戯には仮面の人物たちが現れるそもその契機がよくうかがわれる。すなわち、かれらはムラの閉塞状況のときにきまって現れるものと期待されていたのだ。

さて尖角將軍が異様な形相で現れて開洞を演じた。この將軍は何者だろうか。

尖角將軍は戸口にくるや、両腕を開き、両側の柱につっかいぼうをするような姿勢をとり、体を宙に浮かせ腕力を誇示する。そして、イエの主人をよびカネを出させる。さらに、唐氏仙娘に出会い、仲よくなる。その際、例の道化者和尚が現れ、唐氏仙娘にいい寄るが、このむすめは結局、將軍と桃園洞にでかけてゆく。・修明によると、桃園洞の鍵を管理するのはこのむすめで、彼女だけが「二十四の劇（即ち二十四の仮面）を運びだすことができる」といわれている³¹⁾。そして、ここの扉を開けると、やがて、うつけの若旦那甘生としたたかな下僕役の秦童が登場し、逆境にある秦童が勝利することで居並ぶムラ人の喝采を浴びる。

この一連の流れのなかで、仮面戯の文脈をたどるとき、次のことがいえるだろう。まず、共同体のたちゆかなくなった状況を救う儀礼の場に一連のモノたちがくることが期待される。しかし、かれらをよぶことはそうたやすくはない。土老師がすでにやったような儀礼も必要である。さらに、それをもう一度わかりやすくやってみせるモノが必要である。これが尖角將軍である。かれは人間に限りなく近いが、やはり腕力、靈力に満ちたモノである³²⁾。ソトからやってきたのであり、主側のもてなしを要求する。そして、相応のふるまいにあずかると、巫女役の唐氏仙娘といっしょになって、モノたちの登場を促す。

このあと一団のモノたちがやってきて、イエを祝福する。將軍のあとに登場する秦童などはムラ人そのものである。甘生に雇われて都にいくが、科挙に受かり、一方、甘生は落第したばかりではなく豚殺しの仕事につくが、なれないことなので、これもうまくできない。こうした地位の逆転劇は痛快である。とはいえ、秦童はかならずいつもこのような役割を演ずるわけではない。かれは、ところによっては、夫婦別れを潔くしない愚図の下働きとしても現れ



▲[図版43]晋州五広大の五方神将。崔常壽『野遊・五広大の研究』より。

る。また、徳江では秦童と類似の身分で優柔不断の軟派（軟童^{ルアドン}）、その反対の硬童^{インドン}などというモノも現れる。要するにこれらのモノの登場の意味はムラのどこにでもいるモノたちがきてあそんでいくということにある。

こうしたひとまとまりの仮面戯は実は朝鮮や日本の仮面戯などでもみられた。いま、その対照すべき点をあげると次のようになる。



▲[図版44]長野県新野のさいほう。こののちに馬や牛、翁、神婆などが登場する。

1. 仮面戯の冒頭に先導役あるいは境界を定める

モノが現れること。先に注17でも触れておいたが、さらに韓国では慶尚南道カサンオークワンデ^{カサンオークワンデ}の冒頭に五方神将([図版43])が現れる。日本の仮面戯では長野県新野の雪祭の「さいほう」([図版44])とその「もどき」の二人の登場人物はよく知られている。これらはいずれも共通する性格のモノだろう。

2. 劇的な展開はおそらくのちに付加されたもので、はじめは単にカミが現れては無言で跳舞して退くというかたちだったとみられる。それゆえ、貴州の儺堂戯でも物語を演じる場所では漢族の演目がかかり目に付き、かえって少数民族独自の仮面戯がそこにあるのかどうか、価値が疑われる始末なのだが、こうした後世の脚色はやむをえないものである。たとえば日本の神楽などにおいても同じことがみられる。すなわち近世の後半期に日本神話に基づいて作られた岩戸開きやスサノオのおろち退治の劇などは、むしろ地方の神楽の独自性を薄める結果をもたらしている。韓国でも、朝鮮朝の両班諷刺³³⁾などにはそうした類型性が多少感じられる。もちろん、こうした劇的な展開のなかから、民俗世界の抵抗の精神、独特の言語世界が形成されていったのであり、そのことはまた別の意義を持つのだが。

3. はじめの仮面戯は「訪れるモノ」のかたちに注目しないと解けない。それは巫覡の唱えごとと舞のなかですでに準備されていたが、いったい、どれだけのカミが訪れようとしているのか、その段階ではまだ目にみえない。これをみえるかたちに置き換えるのが「將軍」や「五方神将」などの仕事だった。かれらはもとは巫覡の伴奏者あるいは周辺に位置した者で、文献では儺者とカクワンデ、神楽師などと記された。おそらくはじめは実際に巡り歩いて危機に瀕した共同体を訪れたのであろう。その危機のことを民俗世界では「洪水のとき」と表現してきた。儺公儺母は洪水のとき、生き残った兄と妹であり、朝鮮や日本の仮面は洪水のとき、流れきたものにはじまることが多い。つまりはじめの仮面戯は「洪水」という世の乱離^{みだれ}に由来するのである。

4. はじめの仮面戯はカミの跳舞であった。「儺戯」というのはは土老師たちの用いることばではない。かれら自身は「跳^{ディアオシエン}神（跳ぶカミ）」という。こちらのほうが核心をうがっている。朝鮮では仮面のあそび^{タル}（タッロリ tallori）とか仮面の舞^{タル}（タルチュム^{チュム} talchum）といい、もう少し大きくいうと、クツである（クツは狭義には巫儀のことであるが）。日本では神楽つまり神の^{あそび}楽という。要するに、民間でおこなわれた「儺」は祭儀だけで完結するものではなかった。そこにさらに多様な霊どもの仮面跳舞が加わり、そのことによってはじめて秩序の回復がはかられるものなのであった。

- 1) ・修明「貴州省徳江県トゥチャ族の仮面劇」後藤淑・廣田律子編『中国少数民族の仮面劇』、木耳社、1991年、18頁。
- 2) 以上、三種の儺については廣田律子「貴州省の仮面劇」後藤淑・廣田律子編『中国少数民族の仮面劇』、143-145頁参照。
- 3) 伊藤清司「雲貴高原のまろうど神」『自然と文化』24、1989年、7頁。
- 4) 前引、伊藤清司「雲貴高原のまろうど神」、6,7頁。
- 5) この名称は担い手やムラの人びとのものではなく、研究者らを含めたいわば外部からの呼称であり、ほんとうにふさわしいかどうか問題もある。むしろ単に「儺」あるいは跳神としたほうがよいのかもしれないが、中国では政府主導の「儺戲学会」もあり、日本の研究者もこれを用いることが多いので、さしあたり、通例に従っておく。
- 6) 鄧光華によると、土家族の儺戲は次のように分類される。すなわちさまざまな儺があるうちで、冲儺（祓いの儺）と還願が儺壇を設けて大規模におこなうものである。そして冲儺はさらに、
- | | |
|-----|--------------------------------|
| 太平儺 | 怪異の作用で家庭、家畜によくないことが生じたときおこなうもの |
| 救急儺 | 重病、長患いなどの際におこなうもの |
| 地儺 | 盗み、姦淫、詐欺などの犯罪の嫌疑ある者に対しておこなう神裁 |
- と細分され、還願は
- | | |
|-----|----------------------|
| 寿願 | 長寿の願ほどこき |
| 子童願 | 子が授かったときのお礼にやるもの |
| 過関願 | 子供の健康祈願のために12歳前にやるもの |
- とされる。これらは「一天一夜（二日）」から「十天半月（十日や半月）」まで多様である。そして、土老師たちは、一日のものを跳神、三日のものを打太保、五日から七日のものを大儺とよぶ。この他に小規模なものとしては隔門、解七煞、取替胆（以上は鬼やらいにかかわるもの）、釘胎、送陰人、打喪車（以上は招魂にかかわるもの）などもある（鄧光華「貴州土家族儺壇考略」貴州省民族事務委員会文教処主編『中国儺文化論文選』、貴州民族出版社、1989年、152-153頁）。
- 7) 前引、・修明「貴州省徳江県トゥチャ族の仮面劇」後藤淑・廣田律子編『中国少数民族の仮面劇』、16-49頁。
- 8) 田仲一成『中国巫系演劇研究』、東京大学出版会、1993年、1061-1107頁。
- 9) 具体的には開洞以下の仮面戲の部分が未見とのことである。なお、わたしが徳江の儺戲をみたのは、1995年11月18日から20日にかけてのことであるが、このときでもなお、文化局は「迷信」部分については、全面的には公開させない雰囲気であった。ただし、儺戲に関しては当初の計画どおりにおこなわれた。
- 10) 土家族の人口は貴州省東部に約100万人（前引、鄧光華「貴州土家族儺壇考略」、151頁）、徳江県の土家族は約23万人（《徳江儺堂戲》資料採編組編『徳江儺堂戲』、貴州民族出版社、1993年、1頁）、また 全国では570万人（1990年現在、可児弘明・国分良成・鈴木正崇・関根政美編『民族で読む中国』、朝日新聞社、1990年掲載の人口分布表参照）。かれらはみずからのことを「畢茲卡 bizika」と自称する（漢語の「本地人」の意、前引、鄧光華「貴州土家族儺壇考略」、151頁）。

- 11) これは張毓福^{ジャンユーフ}氏の証言による。茅山派とは道士の宗派をいうことばであるが、少数民族の巫師にもその系派意識はあるようである。
- 12) 前引、田仲一成『中国巫系演劇研究』、1061頁。なお、過関煞の儀は3歳以上12歳以下でおこなうという慣行がある(同書、1062頁)。
- 13) 前引、・修明『貴州省徳江県トゥチャ族の仮面劇』、22頁以下参照。
- 14) 功曹は三清に人間界のことを伝達する者。功曹殿にまつられている。
- 15) これはあらかじめ主壇の下に箕を置き、そのなかに安置されてある。そのばあい男女二体である。これは五方の兵を率いるカミとされ合わせて「地儼」とよばれる。祭場を守護するカミであろう。
- 16) 前引、劉枝萬『中国道教の祭りと信仰』下、389頁以下。劉枝萬は最後に、大元神楽の「ござ舞い」を指摘しているが、的を射た指摘である(414頁)。
- 17) 話の筋は行いすました月明和尚がついに妓女の誘惑に負けるというもので宋代以降流行し(浜一衛『日本芸能の源流 散楽考』、角川書店、1968年、210-211頁)、朝鮮や日本にもその影響がみられた。このばあいの和尚は破戒したダメな僧ではあるが、なぜか祝福者として民間では人気がある。なお、徳江のばあい、この和尚は開洞のところでも現われ、唐氏仙娘にいいより、結婚しようなどという。もともとの役割は、この儼の主催者の真心を調べ、また儀礼の準備が十分なされているかどうかを確かめることにあった(前引《徳江儼堂戯》資料採編組編『徳江儼堂戯』、29頁参照)。
- 18) 鶏の通霊性については、可児弘明「広東巫俗<贖魂舞>について」宮家準・鈴木正崇編『東アジアのシャーマニズムと民俗』、勁草書房、1994年参照。
- 19) これは古代の方相氏に由来するのだろう。チベット系の寺院の儼においては黒帽の行者がこの役を担う。日本に伝来された伎楽の「治道」、また芸能にみられるサルタヒコ、あるいは朝鮮の北青獅子戯に現われる「道案内」^{キルチャビ}や同じく仮面戯にみられるマルトゥギなどはいずれも同じ位相の上にあるといえよう。
- 20) これは唐氏太婆として登場することもある。そのばあいは典型的な農村の老婦の顔をしている。むすめであっても老婦であっても桃園三洞の扉を開ける力を持っているので、重要な存在である(前引《徳江儼堂戯》資料採編組編『徳江儼堂戯』、27頁参照)。
- 21) 貴州省貴陽在住の研究者潘朝霖による教示。祭儀のなかでの役割としては、神々に豚や山羊を献呈するモノといった性格もある。
- 22) なお、送船のときに、土老師は、「五方男女孤魂は来りて、宝馬銀錢、^{たべもののみもの}糧漿水飯を領受し、神船一只は、^{いっそう}別方に游行して顕化されよ」と唱えている(前引《徳江儼堂戯》資料採編組編『徳江儼堂戯』、205頁)。こうしたかたちの船送りのもっとも盛大になったものが台湾南部にみられる王爺船である。
- 23) 打夜胡は、年末に神鬼に扮して追儼をする乞食で、宋代では神鬼以外の者にも扮して観客を喜ばせていた。『東京夢華録』、巻十、十二月の条には、貧しい者三人が婦人や神鬼に扮し、鑼を敲き鼓を撃ち、門付けをして錢を乞うと述べられている(前引浜一衛『日本芸能の源流 散楽考』、240頁)。
- 24) たとえば大門にはいるときの唱え詞では「左脚が門を跨げば^{むすこ}貴子を生み、右脚が門を跨げば^{むすめ}貴児が生まれる。双脚^{とも}齊に^い跨ぎ進れば、男は富貴、女は聡明なるべし」などとも

いう（前引《徳江儼堂戯》資料採編組編『徳江儼堂戯』、383頁参照）。

- 25) この刀の梯子を上る儀は過関煞だけでみられるものではないが、過関煞のなかでは子供の十の関門が刀によって象徴され、これを上ることはすなわち煞を除くことという期待も込められるという（前引、田仲一成『中国巫系演劇研究』、1093頁）。
- 26) 地府にある十二の関という考えは地府十殿に二つを付け加えたもの。この十二の関にはそれぞれ閻君がいて、土老師はかれらに向かって子供の靈魂を奪わないように、身体に返してくれるようにと依頼する（前引、田仲一成『中国巫系演劇研究』、1098頁）。なお、こうした地府の十王、十二王に靈魂の通過を祈願する儀礼は済州島の十王迎えという死靈祭にも反映されている。淵源は中国の道教儀礼にあるということになる。過関の儀は中国南部ではさまざまなかたちで広くみられる。福建省のものについては、葉明生「福建の女神と人形劇—陳靖姑の信仰と傀儡戯『奶娘伝』」、『日吉紀要 語・文化・コミュニケーション』No.26、慶応義塾大学日吉紀要刊行委員会、2001年、64-68頁参照。
- 27) 神鞭をふるうことの意味は、現地での土老師の説明によれば鬼神を追い立てることであった。ただ、法師が法索をふるうことについては、地下の陰兵をよぶという説明もおこなわれている。これは先に引用した田仲一成の文にもあったし（注7参照）、また台湾の研究者徐瀛洲の教示によると、福建の法師たちもそういつているらしい。だがまた、劉枝萬は「悪靈を追放する」と述べている（前引、劉枝萬『中国道教の祭りと信仰』下、38頁）。これらは一見すると、違うことのようにだが、わたしの考えでは、陰兵をよびよせてやることは結局悪しきモノを追放することなので、両者は結果的には同じことを意味している。おそらく陰兵をよぶというのは、五方の将兵による鎮めという観念が成立してからのものでのちに成立した観念であろう。
- 28) これをそのまま信じれば、一代二十年としておよそ1200年前、すなわち唐代からのものということになる。確実な系図としては26代を数えるものがあるという（前引・修明「貴州省徳江県トゥチャ族の仮面劇」23頁）。これだと明代以降のものとなる。こうした民間のあそびはいつからと限定することがむずかしいが、宋、元以来、民間で孤魂野鬼をまつり、儼をさまざまなかたちでやるようになったことを土台にして成立したものとしておきたい。
- 29) わたしの観点からいうと、芸能的な所作はお随きのモノの身体表現にはじまる。高貴なカミの来臨だけでは、祭儀ではあっても芸能にならない。
- 30) 前引、・修明「貴州省徳江県トゥチャ族の仮面劇」、36-38頁。
- 31) 前引、・修明「貴州省徳江県トゥチャ族の仮面劇」、27頁。この將軍や若い女性の名は、金角將軍、唐氏太婆とよばれたりもする。
- 32) 尖角將軍は一面ではのちにやってくるモノたちの先導役の性格も帯びている。他面では人間側を代表してモノたちに向かうともみられる。こうした性格は朝鮮のクワンデなどにもみられた。
- 33) 朝鮮の仮面戯で特徴的な下僕マルトゥギがはじめからあのように饒舌で辛辣な両班諷刺をしたのかどうかは疑問である。あの鋭い批判意識は両班階級のひどい腐敗墮落、あるいは零落を目の当たりにした19世紀のものなのであろう。一方、民俗世界の「従者」はもっとずっと古い登場人物であったとみられる。これはすでに唐、宋の時代から顕著な

活躍をしていた俳優に由来する。そして、なおいうと、かれらはすでにかなり旺盛な批判、諷刺の持ち主ではあった。それはたとえば参軍戯に萌芽がみられる。参軍戯というのは由来についていろいろな説があるが、要するに、愚者と智者の問答によるおかしみを表現したものである（前引 浜一衛『日本芸能の源流 散楽考』、149頁）。ここでみがかれた言語感覚は俳優たちの共通の伝統となって広く維持されたということができよう。